

地域密着型インターンシップ研修 最終報告書

研修目的

1. 被災地のひとつである福島ではどういった復興・支援が求められているのか。
研修先の素材広場はどのように現在の状況を考え、対応をしているのか。
運営方法のノウハウや他団体とのネットワークを学び取る。
2. 地震、津波による被害、原子力災害、風評被害の状況をしっかりと捉え、
どういったことが自分に出来得る復興や支援の形なのかを考え深め、
今後のキャリアプランに生かす。

活動報告

1

研修期間 5/24(火)

研修場所 いわき市



研修内容

パシフィックホテルから撮影

1. 二次避難所となっているサザンパシフィックホテルにて、ニイダヤ水産加工業者の賀澤さんといわき湯元温泉 古滝屋の支配人とその知り合いの方、そして横田さんが集まり、アセスメントと商品企画の相談を受けるのに同行。
2. 横田さんが、福島高専の芥川先生が受け持つクラスにて、夏休み期間中のインターン研修について話をするのに同行。
3. 芥川先生との談話

気づき

賀澤さんの加工場は海から 10m程の距離にあり、津波により大きな被害を受けた。同一の場所で加工場を再建するのは災害保険対象外になるとのことで、仕事を始めるには他の場所へ移らなければならない。現状の聞き取りをして今後どのように力になれるか。

横田さんが行くことで、賀澤さんはとても元気をもらうのだと感じる。最終的には自己で頑張らなければならないが、気にかけてくれる人がいるほど勇気をもらうものはないのではないだろうか。

会いに行くこと、エールを送り続けること、それが支援の基本だと思う。

2

研修期間 5/25(水),5/31(火),6/2(木)

研修場所 山際食彩工房



昼食風景

研修内容

1. 翌日の自衛隊炊き出しに使用する里芋のカット、コゴミの水洗い。
2. 佃煮用に椎茸 10kg のカット。(所要時間 2 時間半) →風評被害にあった椎茸
3. 調理した料理のレシピをパソコンにて入力。
4. ファイルの整理、メモ帳作り。
5. 会津若松市・福島県の郷土料理のレシピをパソコンにて入力。

気づき・課題

山際さんと No,2 の佐藤さん、山際さんの奥さんの妹さん、見習いの 2 人の計 5 人で基本的には工房を経営している。

山際さんは外部での仕事が多く外出が多いが、事務所にいるときはひっきりなしに電話がかかり、訪問客が多い。

佐藤さんも他のレストランで技術指導、セッティングの仕事をしているそう。

どういったお客様とのやり取りがあるのかをよく見ておくこと。

研修初日に比べ、スタッフの方と仲が良くなり話題が広がり始めたように思う。

地元に住んでいる方の話は福島を理解するのに大変役立つ情報源である。

仮設住宅の建てられる地域の地盤や原発を始めた当初の話など新聞から読み取れない部分を大いに教わる。

3

研修期間 5/26(木)

研修場所 南相馬市



自衛隊への炊き出し



南相馬市沿岸部

研修内容

1. 自衛隊駐屯地、南相馬市馬事公苑にて自衛隊へ炊き出しをする。
有機農家さんご夫婦2組、東京農業工業大学の学生4人でスクリーニングをおこなっている部隊、約50名に高知地鶏土佐ジローを使った会津若松の郷土料理「ザクザク煮」と同じく土佐ジローの卵を使った卵焼き、キャベツの浅漬けを振る舞う。
2. 南相馬市沿岸部被災地を案内していただく。
3. 「会津っ子」にて懇親会。

気づき

南相馬市は一部が原発より20km圏内であり、7万人中5万人が避難を余儀なくされている。岩手県や宮城県と同様に、地震、津波の甚大な被害に合いながらも、原発に近いという理由でボランティアが不足しており手付かずの状態だそう。

これから暑くなるにつれ、内陸に達し一向にはけない海水が腐り、ヘドロと化すことが予想される。その結果、ハエやゴキブリがわき感染病が流行ることが危惧されている。

東京電力の福島原発の雇用数は3万人であったそうだ。
「原発のお陰で地域経済が活性化していたんだ…」と言う男性の話を聞きながら、何とも言えない気持ちになり、問題の複雑さを思う。

様々なことが人の予想を上回り起きている。ただ自然の大きさを思わずにはいられない。そして今、まさに私たち人類の生き方を変える転換期だと感じた。

4

研修期間 5/27(金),6/1(水)

研修場所 元気玉プロジェクト運営本部

研修内容

支援物資の仕分け、物資内容をパソコンへ入力。

気づき

主におもちゃの支援物資の仕分けが多いが、特にまだ配送先が決まっておらず、バックヤードにある状況。

バックヤードの状況から見ても「仕分ける」という作業の大変さを知る。
バラバラに送ってきたものをどう分類し、どう片付けるか。

一体、震災直後の食物の支援物資倉庫の状態はどうだったのだろうか。

パソコンに物資の内容を記入するに当たり、細かくルール付けをしなければあまり正確ではないデータができあがるように思うが、管理者と話す機会がない。

本部には、JICA 職員と NICE のボランティアの方々もいらっしやり、それぞれが得意とする分野で支援をしている。
様々な団体の活動を実際に目にすることができ、良い刺激になる。

他団体の主な活動概要

JICA

避難所により情報のバラつきがあるため、一元化に努めている。

(行政とのネットワークづくり)

→行政 HP をみて理解しづらい箇所を上げ、直接行政機関へ赴きヒアリングをする。

→最終的に回覧板のようなものの作成を目指す。

NICE

避難所内の子供と遊ぶボランティア支援。

ヒアリングした避難所内の情報を JICA へあげる。

5

研修期間 5/28(土),5/29(日)

研修場所 新潟市古町商店街



物産販売風景



商品陳列風景

研修内容

1. 素材広場会員さんの商品を販売。
2. 足りないPOPの作成。
3. 商品の陳列。

気づき

商品知識がしっかり頭に入っていないければ、お客様に自信を持って商品をご提案することは出来ない。

自分が客であれば、いろいろと興味付けをしてくれたら大変嬉しいので、商品の価値をしっかりお伝えして、「あら、買ってみようかな。」と思わせることが大事。その為に、商品知識は必須であり、尚且つ声の出し方、顔の表情、動作が重要である。

特に福島のもの卖るときは、好感度大にする必要がある。少なからず「福島頑張っ！」と思い、手に取ってくださる方が多いと思うので、その方たちに対し、「買うことが支援」ということをお伝えすると、買う側も売る側も気持ちに通じ合い、次回につながる。

6

研修期間 6/4(土),6/5(日)

研修場所 ホテルリステル (猪苗代)



焼きそば販売



バルーンアーティストからもらったハート型の風船と花の腕輪

研修内容

東日本大震災復興イベント「GAMBARUZO! ふくしま 2Days in いなわしろ」に焼きそばと物産の販売で出展。

(当日の主な役割)

- 焼きそばをパックに入れる作業。
- 麺や粉の封を開け、作り手の補助。
- 作業台の美化。

気づき

イベントで食品を作り販売した経験がなかったので、何を用意しておけばいいのか、どのように動けば効率が良くなるのか、見当がつかず心配な面も多々あったが、当日は楽しく出来たと思う。

もやし、焼きそばなどの食品の鮮度を保つことが難しいと感じた。
他のブースでは、冷蔵庫を完備してあったりイベント出展に手馴れた感があった。
機械や道具、商品の陳列方法、POPの書き方、のぼりなど学ぶところが多かった。

どれぐらい売上げがあれば儲けになり、損になるのかや、
昼頃にはお客様がくるだろうからその前にこれだけ作っておこうなど
今後は様々なことを数字で考えられるようにしていきたい。

7

研修期間 6/6(月)

研修場所 地域研修 会津中央乳業



工場の隣にソフトクリームとアイスを販売しているアイス牧場

ソフトクリームとヨーグルトのアイス



会津中央乳業工場

研修内容

工場にて商品生産工程、商品誕生経緯、風評被害の状況などの説明を受ける。

商品

会津の雪

絞りたての会津産の生乳「商品名／もうひとしぼり」を低音濃縮（RO製法）して、まろやかな舌触りのヨーグルトを作っている。クリームチーズのようにまったり。

どっちの料理ショー厳選素材で紹介。

RO製法→細長い何本ものロールに生乳を通過させ生乳内の水分を飛ばし濃縮する。

（スポンジで水を吸い取るようなイメージ）

多くの牛乳業者は熱を加えることで水分を飛ばすが、そうすることにより、生乳内の菌の数が少なくなるし、風味も損なわれる。

べこの乳のむヨーグルト

会津産の生乳「商品名／もうひとしぼり」をから製造。ゆっくりゆっくり長時間かけて発酵させているので乳酸菌が多く、まろやかでコクがある。

香料や安定剤等を一切使っていない。とろとろだが、すっきりとした後味。

コーヒー特急。

85%生乳で香料、着色料などの添加物一切なしの牛乳のコクを生かしたコーヒー牛乳。

牛乳嫌いのお客様がこの商品であれば飲めると始まり、今では牛乳も飲めるようになったとか。開封後、段々と香りが飛んでいくところに香料がはいっていないことを実感する。

牛乳たっぷりなのでコーヒーの色が大変薄い。

気づき

お客様へ安全、安心なものをお届けするという理念が大変しっかりしている会社であった。

多くの会社が売上のみを重視し品質管理を怠ってしまうことがある中で、コストが高くても良いものだけを作りたいという考えが一貫して変わらない方針に感動する。

良いものはどうしてもコストがかかる。

突然工場見学の話になったにも関わらず、快く対応していただき大変感謝をしている。

風評被害にあっている現状から、一人ひとりの不安をお持ちのお客様にきちんと説明をして分かっていただくことが大切だと考えられていた。

そういった理由から、私にも大変貴重な時間を割いてしっかり説明してくださった。

大変規模の小さな会社なので、一人ひとりに対応することはものすごく労力を割くことであるが、小さなことから始められているその姿勢に大変好感を持った。

引き続き、いちファンとして商品を購入することで応援をしていきたい。

8

研修期間 6/7(火)~6/17(金)

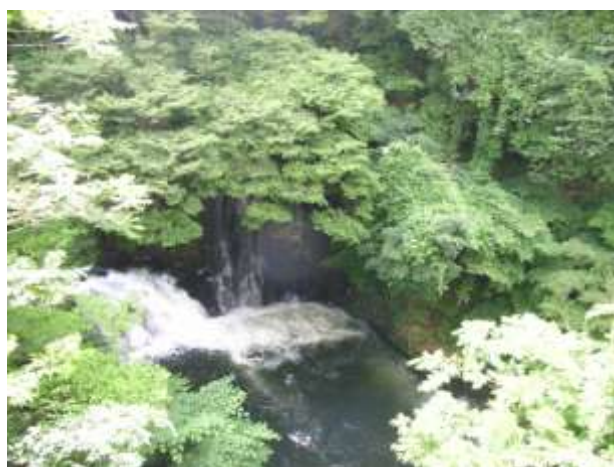
研修場所 東山観光協会



東山温泉観光協会外部と内部



まちなか周遊バス「ハイカラさん」



東山温泉街を取り囲む自然



羽黒山神社

研修内容

1. 併設しているバス停留所のトイレの清掃、協会外の掃き掃除。
2. 毎朝、各旅館へ被災者の受入人数・空室状況の確認を電話にてする。
FAXにて下記あて先へ送信。
 - 受入委員会
受入委員長（原瀧旅館）副委員長（旅籠芦名、くつろぎ宿）
 - 会津若松市観光課
 - 福祉保健事務所
3. 協会にて販売している土産物の包装。
4. 自転車にて配布物の外回り業務。（イベントポスター・チラシ・総会案内 etc.）
5. 窓口対応、電話対応、その他雑務。
6. ファイル背表紙の作成、添付。

観光協会事務局の主な働き

- 一般客向けの東山温泉旅館、また会津若松市観光スポットの案内。
- 問い合わせ対応。（日帰り入浴 etc.）
- 会員旅館の事務連絡、調整役。
- 様々ある組合の連絡のかけはし。（商店、芸者、按摩／マッサージ、社交部会 etc）
- 市の行政機関、商工会議所、観光物産協会との連絡。

運営費用

非営利団体

- ◇ 補助金
- ◇ 会員旅館からの会費
- ◇ 送迎の手数料
- ◇ 観光イベントでの収益

気づき

観光協会へ様々な団体よりボランティアをしたいとの申し出がある。（炊き出し、演奏会、落語 etc.）しかしながら、色々企画があっても人数が集まらないことも多々あるそうだ。それだけイベントが多いのかもしれないし、先のことを見据え、職や住居を探したり役所へ赴いたり、個人やらなければならないことがあるのだろう。

炊き出しについては2次避難者へ行くことは大変無駄なことだと強く思う。何かしたいと思う気持ちは理解できるが、本当にそれが相手に必要なことなのか見極めてからしたほうがいいのではないか。「ボランティアをする」行動自体に重きを置いているのでは、ありがた迷惑である。

9

研修期間 6/8(水)～6/16(木)

研修場所 原瀧旅館



原瀧旅館外観



被災者へ食事提供する部屋



川床風景



大熊町の方を川床へご招待した際の夕食

研修内容

1. 大熊町被災者への昼食提供の手伝い。(11:30~14:00)
朝食 約 150 食/昼食 食約 80 食/夕食 約 180 食 (避難者 195 名、6/16 現在)
2. 6/10 (金) 大熊町の方を併設する川床へ夕食のご招待をする。
3. 平賀総支配人による観光業と地域活性化の講義。

気づき

昼食の手伝いはあまりなく、部屋番号と名前を聞いてチェックする係、調理場から食事を運ぶ係、汁物またはご飯をよそう係（基本昼食は一品なことが多い。）の 3 名~4 名がいれば十分な業務であった。

短期間の中で被災者の方と話す機会を設けるのはなかなか難しかった為、スタッフの方から現状を伺うことにした。

- 朝昼晩食時の被災者の人数について→夜朝昼の順で多い。食事に飽きて外食する人もいる。
- 支援物資や保障金額について→市役所のほうで物資がもらえるそう。 *詳細不明
- 高校生以下の子供が日中館内にいるがどうしてか
→地元高校（双葉商業高校？）から会津板下高校に移ることが嫌で休学中なのかもしれない *詳細不明
- 昼食を一人で食べに来る小学 3~4 年生の子供→学校が嫌だとのこと *詳細不明
- 困ったことはあったか
→被災者受入当初は一般家庭宅とは違う為、洗濯をする/干す場所の確保、日用品を買う、もしくは通勤、通学の交通の便、部屋内にカレンダーをつける場所がないなど整備するところが多々あったようだ。現在は特に問題はなく、旅館業の先行きが心配だそう。

他

所感だが、ここ原瀧旅館、また東山温泉の旅館に避難されている方は、あまり困っていないという印象を持つ。4/3 から旅館での避難生活が始まり寝食については心配がいない。そして、既に震災から3ヶ月が経っているので、物質面ではかなり充実している。しかし、将来の不安はきっと量りきれないものであろう。

スタッフに聞いた話では、原瀧旅館に避難している若い方は働きに外出している方が多いよう。旅館内では自治会組織があるし、月に一度館内清掃を全員でしたり、原瀧駐車場で草むしりをしようと呼びかけがあったりと被災者自らが行動を起こしているようだ。

被災者へ「病院へは行くのか」、「お粥にしておこうか」、「学校はどうしたんだ」等、お声がけしているスタッフの様子、そして被災者同士がコミュニケーションをとっている姿が印象的だった。

原瀧旅館内にはお酒を飲むスペースが食事をする場所とは別にある。接客部の紺野係長曰く、日中ずっと介護をしている女性が夜ほんの15分程来て一杯だけお酒を飲みに来るようだ。決して沢山ではないけれども自分の思いを話していく。

紺野さんやその他のスタッフにお世話になっているからと、旅館の手伝いをする被災者もいる。

思った以上に2次避難所では被災者とスタッフの心の触れ合いがあるように感じた。

10

研修期間 6/11(土)

研修場所 福島大学



シンポジウムのあった福島大学

研修内容

東日本大震災災害復興シンポジウムへ参加。

福島大学災害復興研究所主催

出演者：関西学院大学災害復興制度研究所 山中氏

福島大学教授 鈴木氏

ビッグパレットふくしま避難所県運営支援チーム 天野氏

東山温泉 原瀧旅館総支配人 平賀氏

福島大学教授 三浦氏

気づき

5名それぞれの立場からの視点、意見が聞けて大変勉強になった。

現在研修をしていて、現場に来ていてもすべてを理解できるわけではないと痛感していたときだったので、様々な働きをしている方たちの話を聞いて仕組みを理解する手助けとなった。

今後のキャリアにどう生かすか。

支援や協力の分野で仕事をしていきたいと考えているので、まずは現場を経験でき大変良かったと思う。どういったことを被災者は求めているのか、また行政の対応はどうなのか。

まだまだ福島の実況を把握できていないため判断がつかないが、様々な活動をされている方たちとお会いして、自分のやり口の方向性が徐々に見えてきていると思う。

まずはこの研修で感じたことを発信していくことが、今私に出来るひとつの支援の形だと考える。

そして、被災者の方々に少しでも元気でいてもらうために、エールを送り続けること。

引き続き私に出来ることを精一杯行っていきたい。